

「^{わこんようさい}和魂洋才」 ～香川漆芸のイノベーション

「蒔罨」と書いて何と読むかご存知でしょうか。知らない人には全く見当もつかないと思います。答えは「きんま」。香川漆芸の代表的な技法の一つです。

高松は昔から漆芸が盛んな土地柄です。その基礎は、江戸時代後期に高松藩主松平家のお抱え^{しつこう}漆工だった玉楮象谷（たまかじぞうこく）が中国やアジアの漆技法を深く研究し、独自の技法を作り上げたことにあります。そして、^{きんま}蒔罨、^{ぞんせい}存清、^{ちようしつ}彫漆などの伝統技法は、明治、大正、昭和、平成と幾多の名工によって受け継がれ、これまで五人の人間国宝を高松から生み出しています。

「瀬戸内海を望むゆたかな風景の中で育まれてきた讃岐の漆は、他産地の漆芸に比べると、その明るく華やかな色彩に大きな特徴がある」（注）とされています。その独特の技法が生み出す美しさは、時代を経ても色あせることのないものです。しかし、一方で需要の低迷や後継者不足で、香川漆器も産業としての存続が大きな課題となっています。

変革（イノベーション）が必要なかもしれません。そのための試みの一つとして、香川県などと共同した大胆な魅力発信の取り組みが始められています。昨年は、人間国宝の山下義人氏をはじめ香川漆芸の作家たちがイタリアの有名デザイナーの靴のヒールに蒔罨などの技法で装飾を施しました。そして今年は、イタリアのブランドとコラボして漆で加飾を施した「レッドカーペットに似合うパーティーバッグ」を作成。いずれも相当高価な品にもかかわらず、完売したそうです。

漆器は海外で「JAPAN」とも呼ばれる日本を代表する伝統工芸です。その意味で、これらの靴やバッグはまさに「和魂洋才」の新しい美の逸品とも言えるでしょう。オンリーワンの価値を持つ香川漆芸を次世代にしっかりと伝えていくためにも、関係者の果敢なチャレンジを応援していきたいと思います。

（注）「漆の家」ホームページ(<http://urushinoie.jp>)より引用

香川漆芸×セルジオ ロッシ×家庭画報 #upTAK

